

緻密な表現で、  
日本の文化や伝統を  
描き出す画家。

幕末の志士を多数輩出した地、高知県に日本の文化や伝統を緻細かつ緻密な表現で描く画家がいる。油彩画家の北村久美だ。

父は書を嗜み、姉は和裁をしていた。何かを作り出すことが幼い頃から自然と身につけていたのだろう。北村が絵を描き始めたのはごく自然な流れだった。絵を描き始めて数年後にはフランスで長く続く展覧会、ル・サロンに入選。わずか数年の画歴で格式高いこの公募展に入選した事実は、彼女の実力が本物だということを世界に知らしめた。

その後、一度は絵を描くことを辞めてしまった彼女だが、自分を試すために、そして自信をつけるために絵を描くことを再開する。慌ただしい日々を送っていた彼女にとって、絵を描くということとは最も心が安らぐ時間だったそうだ。再び絵筆を握るようになった。

て、選んだモチーフは「日本の文化」。以前から嗜んでいた茶道や華道、着物の着付けなど、自らが持つ知識を生かせるものだったからだ。

作品中の舞妓や芸妓の着物は、実際に北村の母が持っていたものを見ながら制作する。「実際に目にしたものしか描かない」という彼女は、曲ったことを嫌う、真つすぐな性格。帯をひとつ描く際にも、刺繍針の差し方までじっくり観察する。結んだ時にできる帯の膨らみ方や影のでき方など、観察を重ねた上で作品を作り上げていくのだ。

見たものを素直に作品に反映する根気のある作業は、実直で一本の芯が通った彼女らしい描き方なのかもしれない。きっぱりとした性格は、山と海に囲まれた高知県の地形に育まれたものだと言えよう。



北村久美《花魁と手鏡》  
油彩 キャンバス / 116.5 x 90.9 cm / 2016

Hisami Kitamura

キタムラ ヒサミ